

## 第二工学部の大先輩との不思議な縁

東京大学生産技術研究所 准教授 岡部 徹

私は、東北大学 素材工学研究所（現多元物質科学研究所）から、2001年に生産技術研究所に赴任しました。今は、チタン、ニオブ、希土類金属、白金族金属などのレアメタルの新しい製造プロセスやリサイクル技術の開発に関する研究を行っております。

京大→MIT→東北大と、研究機関を転々としてきましたが、それまでは東大とは縁もゆかりも無かったため、生産技術研究所の生い立ちどころか、東大の概要すら知りませんでした。赴任してまもなく、私を東大に引っ張って下さいました前田先生（現所長）から生研の沿革についてお教えいただき、生産技術研究所の母体が、第二工学部であることを初めて知りました。東北大時代から親しくさせていただいていた平林先生や二上様が、第二工学部のご出身でしたので、人の縁の不思議さを改めて認識した次第です。

私の研究略歴をご紹介させていただきますと、京都大学の冶金学科の非鉄金属製錬研究室（小野研）でチタンやニオブの製錬に関する研究を行ったのが、研究者としての出発点でした。学位取得後、すぐに日本学術振興会の海外特別研究員（ポスドク）として米国MIT（Sadoway 研）に留学しました。MITでは、約3年間、米国企業と共同で電子材料用のタンタル粉末の製造プロセスに関する研究を行いました。帰国後、東北大学素材研（早稲田研、のちに梅津研に移籍）に赴任してからは、チタンや希土類金属の新製造プロセスや各種リサイクル技術の開発に関する基礎研究に取り組みました。

偶然、私が東北大で行っていたチタンの研究に二上様がお興味を示され、学生時代の親友である平林先生に、後輩を通じて私を紹介するように頼まれたようです。今から10年以上前のことでしたが、このときすでに平林先生は、東北大の金属材料研究所をご退官されて、年数が経っており、先生の多くの弟子や教え子達は、私が勤めていた研究所をはじめ東北大の材料系学科の教授として活躍しておりました。当時、最も若い助手の一人だった私からみれば、かつて金属材料研究所の所長も勤められていた平林先生は、“雲の上の存在”でした。そのような状況で、親子以上の年齢差がある大先生がわざわざ研究所に足を運んで若造の私の研究についてお問合わせ頂き、のちに数々のお手伝いをして下さった時には、恐縮すると同時に戸惑いを覚えました。

振り返りますと、今から20年ほど前の京大の学生時代に、チタン中の固溶酸素の侵入位置の解析に関する Koiwa and Hirabayashi の論文（1969）を幾つか読んで感銘を受け、当時、教授として京大に在籍されていた小岩先生（東大出身）にはいろいろと懇切にお教え頂きました。しかし、まさか共著者の Hirabayashi 先生がお元気でおられるとは夢にも思っておりませんでした。な

ぜなら、(かつて平林研の助手であった) 小岩先生が当時すでに年配の教授でしたので、学生の私にとっては、“小岩先生の先生”である Hirabayashi 先生は、すでに別の世界の人であると勝手に思い込んでおりました。実を申しますと、論文中の Hirabayashi 先生が、かの平林先生と同一人物であることを認識したのは、迂闊にもかなり時が経ってからです。偶然の重なりとはいえ、研究を通じてバックグラウンドも世代も異なる大先輩、大先生とお知合いになれば、これを機縁にさらに一段と広がった人の輪の大切さを再認識した次第です。

チタンの研究をしていなければ、平林先生や二上様とは縁もゆかりもない私ですが、今は、公私ともに大変お世話になっております。一例をご紹介しますと、私は生産技術研究所に赴任してすぐに、「レアメタル研究会」を立ち上げました。発足当初から、二上様には研究会の幹事をお願いし、今も毎回、見事な議事録を作成していただいております。二上様とレアメタル研究会を立ち上げた頃は、レアメタルは今ほど注目されていないどころか、東大で行う研究としては“マイナーすぎるテーマ”でしたので、研究会がいつまで続けられるかどうか心配でした。しかし、予想に反して、昨今はレアメタルへの社会的な関心が非常に高まり、ブームに乗って非常に活発な研究会となっております。研究会も発足から6年が経ち、毎回50人～100人が参加する会合と発展し、今ではレアメタルに関する産官学の重要な交流の場となっております。これまで、合計30回の研究会を開催し、累計1600人が参加したことになりますが、これも二上様、平林先生をはじめ、大先輩の強力なバックアップがあってこそこの成功です。最近では、研究会の存続や発展よりも、二上様と平林先生のご健康の方が心配ですが、今も、両大先輩には岡部研の研究会や忘年会にはご参加いただいております、研究室一同、皆が感謝しております。

今後もチタンやレアメタルのプロセス研究を続け、微力ながらも社会に貢献していく所存です。生産技術研究所の母体である第二工学部の名を汚さぬよう、また、先輩方の多大なご支援に支えられ今日の私があることに感謝し、これからも研究と教育に励みます。今後とも、皆様方のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

2008年2月

関連資料：

'チタン研究を通じて広がる人の輪', 岡部 徹: 研友, vol.57 (1999) p.43.

岡部研ホームページ (<http://www.okabe.iis.u-tokyo.ac.jp/>) にも、関連情報をいくつか掲載しておりますので、ご覧ください。

(‘第二工学部の大先輩との不思議な縁’, 岡部 徹: 東京大学第二工学部昭和22年卒業生記念文集 (2008.2) pp.7-9.)